被災地を結ぶ、伝える活動

伝承ロード縁（えにし）

教訓が、いのちを救う。

3.11 DENSHO ROAD

2026 vol.19

被災から復興まで 足跡振り返る
山田町まちなか交流センター

「大川伝承の会」共同代表の佐藤さん
郡山女子大学短期大学部
伝承ロードをゆく 第8回 宮城県松島町・東松島市
福島県田村市
雄勝ローズファクトリーガーデン
道の駅たのはた 思惟の風

島越ふれあい公園（岩手県田野畑村）

発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構

震災伝承ギャラリーが入る山田町まちなか交流センターは町中心部にある複合施設

被災から復興まで 足跡振り返る

山田町まちなか交流センター

岩手県山田町の中心部、山田町まちなか交流センターに「山田町震災伝承ギャラリー」があります。センターは三陸鉄道の陸中山田駅前に立地し、周囲にはスーパーや飲食店などが立ち並び、真新しいコンパクトな市街地を形成しています。ギャラリーも誰もが気軽に立ち寄って見学できる震災伝承施設となっています。

山田町は東日本大震災で壊滅的な被害を受けた地域の一つ。津波の襲来で486・9㌶が浸水。町内の死者686人、行方不明者148人、全半壊家屋は3167戸で被災家屋の割合は46・7％となりました（2024年4月26日発表）。

復興事業により整備された町中心部にコミュニティセンター的要素を兼ね備えた、まちなか交流センターが2016年11月に開設されました。鉄骨造り3階建てで、震災伝承ギャラリーは2階の一室として21年4月にオープン。町内では唯一の第3分類の震災伝承施設で、主に四つの展示に分かれています。

「2011・3・11の記録 山田町の被災状況」は町全体や地区ごとの被災概要を地図や被災当時の写真、被災前と被災後の空撮写真などを多用し一目で分かるように紹介。「船越小、津波にのまれる」では校務員が「もっと高い所に逃げよう」と校長に進言したことで、学校にいた児童が全員生き延びた出来事をドキュメンタリータッチで説明しています。

町民も気軽に立ち寄る

他にも震災発生から災害対策本部を廃止した2012年5月1日までの出来事を時系列でまとめた「巨大災害と格闘した日々」、町復興計画に基づく「新しい街の誕生」では地区ごとの新たな町並みを写真で紹介しています。

ギャラリーの中央には被災した道路標識が置かれています。汚れが付いたままで傷ついたり折れ曲がったりした国道標識や距離標、津波注意板、津波浸水想定区域標識が津波の衝撃を物語っています。震災から復興までの過程や町民の証言を選択して映像で見ることができるモニターもあります。

独立した震災伝承施設ではありませんが、一室にコンパクトにまとまっています。2階には他にテーブル席や畳敷きがあり、列車やバスの待ち時間に寄る町民、学校の放課後や長期休暇の時に訪れ、勉強の場として利用する小学生の姿も。ギャラリーは町民が震災を振り返る場にもなっています。

開館は午前9時～午後5時。入館無料。休館は火曜（祝日の場合は開館し翌平日休み）と年末年始。

所在地／岩手県山田町川向町6-24
TEL0193-65-7028

震災伝承図る若年世代を後押し

山田町教委生涯学習課の笹原さん

「小さなギャラリーですが、町中心部の商業地区で駅前という立地や、まちなか交流センターでの活動など、観光客はもちろん町民にも気軽に足を運んでもらえる施設だと思います」と話すのは、山田町教育委員会生涯学習課で町内の震災伝承などを担当する笹原祐起さん。

震災時はやや高台にある町役場の4階に勤務し、支援物資の運搬や分類などを行っていました。震災時には役場隣の中央公民館・中央コミュニティセンターに多くの町民が避難していましたが、火災が迫っていたため、より安全な避難先を目指し、山間の狭い町道を通り、町内陸部の豊間根地区へマイクロバスで何往復もしたことを振り返ります。

「若年世代の震災伝承をバックアップしていきたい」と語る笹原さん

震災から15年が過ぎ、町の人口は約1万9000人から約1万3000人に減り、町職員約180人中、約130人が震災後の入職者。「被災自治体として初任者研修で震災時の困難な状況を説明し伝承を図るとともに、災害時における備えや心構えの徹底に努めています」と強調します。

福島の海岸に漂着

昨年、福島県の海岸で山田町の町名が入ったプラスチック製のくいが見つかりました。ギャラリーの存在を知った福島県の人が電話で伝えてくれたそうです。震災当時、町役場に近い御蔵地区では国土調査が行われていて、そのくいと見られています。町内で津波にのまれ、行方不明だった女児(当時6歳)の骨の一部が宮城県の沿岸で見つかり、遺族に返還された出来事を載せた新聞記事もギャラリーに展示しています。

山田町と岩手県立山田高等学校は包括連携協定を締結し、在校生の「ふるさと探究」に力を入れています。これまで町内に点在する津波の教訓を刻んだ石碑の調査や解読と説明パネルの設置、ガイドマップの作成、町民向けに石碑を巡るツアーの開催などに取り組みました。

町内で被災した道路標識も展示

見やすいパネル展示で山田町の被災概要を紹介

2023年度からは町内の小学校で5年生を対象に、山田高校生が「防災出前授業」を行っています。岩手県立釜石高等学校との交流事業では、夏に山田町で開催する「海の運動会」に参加する釜石の1年生に、山田の2年生が震災ガイドを行うなど、同世代同士、または下の世代への伝承活動に当たっています。釜石との交流は本年度も続き、夏は8月25日に実施予定です。

9月には山田の1年生が三陸鉄道の「震災学習列車」に乗って、沿線の震災から現在までの足跡を学びます。「若者世代が震災を学び、伝承を継いでくれる活動はとても大切。このような取り組みを応援していくのが被災自治体として、地域の大人としての役目です」と次世代の今後の取り組みに期待を込めています。

遺族と教員の立場で伝える

「大川伝承の会」共同代表の佐藤さん

東日本大震災の津波が校庭で渦を巻き、児童と教職員が犠牲になった宮城県石巻市河北地区の大川小学校は、2021年7月に「石巻市震災遺構大川小学校」として一般公開を開始。「大川伝承の会」共同代表の佐藤敏郎さんは遺族と元中学校教員という立場で、震災前後の大川や自身の経験を訪れた人に語りかけています。

「震災遺構大川小学校は解説のパネルが少ないので、若いメンバーの力も借りて伝承を継続できれば」と佐藤さん

震災の津波で大川小学校の全校108人のうち児童74人、教職員10人が犠牲になりました。震災遺構となって間もなく5年。国内外から幅広い世代の見学者が訪れています。

取材日の4月上旬、佐藤敏郎さんは東京や新潟、福島の大学、専門学校に通う学生5人をガイド。柱や天井がむき出しになった校舎の前で、「あの日、大川小の6年生だった次女は津波の犠牲になりました。楽しい思い出が詰まった校舎が、手を合わせる場所になりました」と語ります。他の見学者たちも立ち止まり、佐藤さんの話に聞き入ります。

震災当時は女川町立女川第一中学校（現女川中学校）の教員だった佐藤さん。中学校は海に近く、大きな揺れの後に避難ルートに沿って生徒や教職員と高台へ逃げました。間もなく、大津波は女川の町に襲来。「おもちゃのように流れていく建物を、高台からただただ眺めることしかできませんでした。他の地域の状況が分からなかったので、女川にいる私たちが最もひどい目に遭っていると思っていました」と振り返ります。数日後、女川で再会した妻から次女が津波の犠牲になったと聞き、「涙も出ないほど、がくぜんとしました」と当時の心境を明かします。

大川小学校の悲劇は教員の判断ミスや防災対策の問題が招いたという意見が多数寄せられました。遺族であり教員でもある佐藤さんは「大川小の教職員も命を落とし、もう話を聞くことはできません。ですが教職員だったら子どもたちを助けたい、守りたいという思いがあったはず。一方で、他の方法はなかったのかとも考えました」と苦慮します。

学生ガイドが増加

在職中、大川小学校の津波被害の検証、伝承、想いを共有するため、大川伝承の会の前身となる「小さな意味を考える会」を数人で立ち上げました。14年に東松島市立矢本第二中学校に赴任し、15年3月に退職。

16年12月に大川小学校を拠点に、大川伝承の会主催で定期ガイドを始めました。初期メンバーは遺族ら7、8人でしたが、3年前から東北大学の学生が語り部活動に取り組み、福島大学や宇都宮大学、東京大学等とも関わりを持ち活動を広げています。多くは震災を経験していない、震災の記憶がない世代ですが、ガイドとして活躍。

「彼らはよく勉強していて、本当に心強い存在。蓄えた知識を卒業前に後輩に引き継ぎ、社会人になっても震災や大川のことを広めてくれています」

佐藤さんは大川小学校が震災遺構として残されたことは、町や生活があった事実、津波が押し寄せた事実をイメージしやすく、意義があると考えています。学生ら若い世代と連携し「多くの児童が命を落とした悲劇の場所というだけではなく、未来を拓く場所であるとも伝えたいです」と語ります。

県外から訪れた学生グループをガイド

石巻市震災遺構大川小学校所在地／
宮城県石巻市釜谷字韮島94

希望の光を灯し 記憶を継承

郡山女子大学短期大学部

ゼミ生メンバーは全員で10人。（写真左から）京谷さん、田川さん、志賀さん、佐藤さんならびに小松教授から話を伺いました。当日はプロジェクトで制作した灯ろうも持参いただきました

郡山女子大学短期大学部が主催する「復興の灯火（ともしび）プロジェクト」は、震災の記憶と地域の伝統文化を、震災の記憶が薄まりつつある若い世代と共に未来へつなぐ活動です。海老根（えびね）伝統手漉（てすき）和紙を使用した灯ろうを地域の児童・生徒や復興公営住宅の住民らと共に制作し、毎年3月11日に郡山駅前で展示します。地域の伝統文化を通じて、福島の歩みを次世代へ継承しています。

同短期大学部地域創成学科2年の「つなぐデザインプロジェクト」のゼミ学生は、プロジェクトの企画・運営に携わっています。3月11日のイベント展示・運営や被災者のコミュニティ支援などに取り組むNPO法人みんぷくが主催した復興公営住宅での灯ろう絵付けワークショップにも参加しました。

田川かえでさんは「参加者の皆さんとどのように接すればよいか分からず初めは緊張しましたが、絵付けのモチーフを一緒に考えていくうちに自然と会話が生まれました」と笑顔を見せ、京谷穂花さんも「私たちが事前に制作した折り紙の飾りや絵の具、クレヨンなどを使い、皆さん思い思いに楽しんでいました。この日を毎年待ち望んでいるという声を聞き、活動の継続性を実感しました」と手応えを語ります。

メインイベントの灯ろう展示

活動引き継がせたい

3月11日にJR郡山駅西口広場で行った灯ろう展示には、地域の小・中・高校生や大学生、住民が絵付けした灯ろうも合わせて約350基が並べられ、多くの市民がその柔らかな光に足を止めました。佐藤百恵さんは「今回参加してくれた高校生が会場に駆け付け、火を絶やさないよう見守ってくれていた光景が印象的でした」と振り返ります。

震災当時は幼かった学生たちにとって、この活動は自身の役割を見出す機会にもなりました。志賀さくらさんは「震災の伝承は被災した人にしかできないと思っていましたが、記憶がほぼない私たちだからこそ寄り添える復興支援や継承の形があることに気付きました」と話します。

指導する小松太志教授は2018年の第1回から活動に携わってきました。当初は市の単年度事業でしたが、19年からは大学主体の継続事業として取り組んでいます。「震災の記憶が薄れつつある中、若い世代が地域と交流しながら震災や復興について学ぶ機会として、継続していく意義は大きい。地域の伝統文化や灯ろう制作を通じて、前向きに関わることを大切にしています」と話します。

3・11伝承ロード推進機構 震災伝承施設紀行

伝承ロードをゆく

第8回 宮城県松島町・東松島市

取材／一般財団法人3・11伝承ロード推進機構　事業部長　遠藤 明

一般財団法人3・11伝承ロード推進機構の職員が東日本大震災の教訓・伝承を後世に伝える「3・11伝承ロード」をたどり、震災伝承施設を取材する連載企画の8回目。今回は宮城県松島町・東松島市を訪ねます。

❶遊覧船の発着所である「観光桟橋」や観光施設「松島離宮」が隣接し観光客が行き交う広場の一角に立つ「3.11東日本大震災伝承板ー仙台塩釜港（松島港区）」
❷写真右から東北地方整備局北上川下流河川事務所の土岐副所長、遠藤、髙橋管理課長、鳴瀬川吉田川流域治水出張所の長岐所長
❸震災の教訓から、野蒜水門は遠隔操作できるシステムが導入されています

景勝地に配慮し復旧

東日本大震災の復旧・復興事業では防災機能はもちろん自然景観の保全も重視されました。日本三景松島や奥松島の震災伝承施設で当時の状況を学ぶことができます。

震災伝承施設第2分類「3・11東日本大震災伝承板－仙台塩釜港（松島港区）」（地図❶）には、約30億円にも上る仙台塩釜港松島港区の港湾施設の被害状況とともに、島しょ群による津波減衰効果を考慮した高さで防潮堤を復旧したこと、「特別名勝」松島の景観に配慮し、胸壁表面に「秋保石」が張り付けられていることなどが紹介されています。

また、東松島市の野蒜水門は洪水、高潮、津波いずれにも対応する高さの堤防とともに、2017年2月に復旧・復興された治水・防災インフラ。景観に配慮し、表面にれんが装飾が施され、これらの概要は「鳴瀬川河口部 復旧・復興の概要看板（野蒜水門）」（地図❷）に記載されています。

同じ敷地に設置された震災伝承施設第1分類「鳴瀬川0・6k右岸 津波到達情報看板」（地図❸）を見ると、この地点に787㌢の津波が到達したことが分かります。この看板には鳴瀬川や吉田川はもちろん北上川、旧北上川、江合川を遡上した津波の情報も記載。河口から49㌔の地点でも津波到達があったことが記されています。

東北地方整備局北上川下流河川事務所によると、この辺りは水上バイクや釣りなどで訪れるレジャー客も多いスポット。土岐範彦副所長は「看板が地域の皆さんや奥松島を訪れる観光客の方々に教訓を

「震災伝承施設」とは？

東日本大震災の事実や記憶、経験を伝承する「3.11伝承ロード」を構成する施設で①震災の教訓が理解できるもの、②震災時の防災に貢献できるもの、③震災の恐怖や自然の畏怖を理解できるもの、④災害における歴史的・学術的価値があるもの、⑤その他、のいずれか1つ以上に該当することが条件。①～⑤1つ以上の条件を満たす施設を「第1分類」、加えて公共交通機関等の利便性が高かったり、近隣に駐車場があったりと、来訪者が訪問しやすい環境にある施設を「第2分類」、さらに案内員が配置されていたり、語り部活動が行われたりといった来訪者の理解しやすさに配慮している施設を「第3分類」としています。

❶ 3.11東日本大震災伝承板ー仙台塩釜港（松島港区）（宮城 第2-026号）
宮城県松島町松島浪打14-1　松島海岸グリーン広場内

❷ 鳴瀬川河口部 復旧・復興の概要看板（野蒜水門）（宮城 第1-057号）
宮城県東松島市野蒜立石　地内

❸ 鳴瀬川0.6k右岸 津波到達情報看板（宮城 第1-053号）
宮城県東松島市野蒜立石　地内

❹ はなはなプロジェクト 浪分櫻第11号（宮城 第2-044号）
宮城県東松島市野蒜字後沢

「はなはなプロジェクト」
代表松田正子さん（**写真右**）、鈴木南枝さん

「植樹に協力いただいた自治体の方々、『浪分櫻』の碑となった稲井石を無償提供いただいた石巻市の稲井石材商工業協同組合など、多くの皆さんには感謝しかありません。何カ所もの候補地の土地の状態を自分の目で直接確かめ、トラックで京都から桜を運び、植樹後も現地に足を運び続けてくれた第16代佐野藤右衛門さんは2025年10月に亡くなりました。『桜の木には亡くなった方々が花になって帰ってくる。桜が咲いたら木の下に来て、亡くなった方々と会ってほしい』と話されていたことを思い出します。桜が地域の方々にかわいがってもらいながら、津波の教訓を伝え続けてくれるように願っています」

「はなはなプロジェクト」の宮城県内震災伝承施設

第1分類

- **浪分櫻第5号（宮城 第1-077号）**
  石巻市北上町十三浜字小田93-4　石巻市にっこりサンパーク内
- **浪分櫻第6号（宮城 第1-078号）**
  塩竈市一森山　塩竈（しおがま）神社四方跡（よもせき）公園内
- **浪分櫻第12号（宮城 第1-079号）** 松島町松島字町内56　観瀾亭敷地内
- **浪分櫻第15号（宮城 第1-080号）**
  南三陸町戸倉字宇津野50-1　南三陸町立戸倉小学校隣接公園内
- **浪分櫻第16号（宮城 第1-081号）**
  南三陸町志津川字新井田166-1　志津川保育所内
- **安寧櫻第6号（宮城 第1-082号）** 岩沼市玉浦西2-7-2　まごころ公園内

第2分類

- **浪分櫻第1号（宮城 第2-036号）**
  仙台市若林区荒井東1-9　地下鉄東西線荒井駅南側ロータリー内
- **浪分櫻第2号（宮城 第2-037号）** 石巻市日和が丘　日和山公園内
- **浪分櫻第3号（宮城 第2-038号）**
  石巻市渡波字大森30-2　宮城県慶長使節船ミュージアム（サン・ファン館）敷地内
- **浪分櫻第4号（宮城 第2-039号）**
  石巻市北上町十三浜猪の沢44-1　石巻市相川地区コミュニティセンター敷地内
- **浪分櫻第7号（宮城 第2-040号）**
  気仙沼市三ノ浜　気仙沼大島大橋三ノ浜転回場内
- **浪分櫻第8号（宮城 第2-041号）** 名取市美田園8-52　美田園中央公園内
- **浪分櫻第9号（宮城 第2-042号）**
  多賀城市中央2-7-1　JR多賀城駅北口ロータリー内
- **浪分櫻第10号（宮城 第2-043号）** 岩沼市里の杜3-20-2　里の杜中央公園内
- **浪分櫻第11号（宮城 第2-044号）** 東松島市野蒜字後沢
- **浪分櫻第13号（宮城 第2-045号）** 七ヶ浜町代ヶ崎浜八ヶ森　多聞山内
- **浪分櫻第14号（宮城 第2-046号）** 女川町女川1-1-1　女川町役場新庁舎敷地内
- **安寧櫻第1号（宮城 第2-047号）**
  仙台市青葉区青葉山無番地　地下鉄東西線国際センター駅前広場
- **安寧櫻第2号（宮城 第2-048号）** 石巻市中央2-11-21　かわまち交流拠点
- **安寧櫻第3号（宮城 第2-049号）** 石巻市大原浜字町44　鮎川大原浜慰霊公園
- **安寧櫻第4号（宮城 第2-050号）**
  石巻市雄勝町雄勝字伊勢畑2-4　雄勝地区震災慰霊公園内
- **安寧櫻第5号（宮城 第2-051号）** 多賀城市大代6-3　東地区運動広場内
- **安寧櫻第7号（宮城 第2-052号）** 松島町松島犬田 西行戻しの松公園内
- **安寧櫻第8号（宮城 第2-053号）** 松島町幡谷字泉ケ原　明治潜穴公園内

鳴瀬川0.6k右岸
津波到達情報看板

復旧・復興記念碑と共に「鳴瀬川河口部
復旧・復興の概要看板（野蒜水門）」を設置

ベルトコンベアの設置跡を活用した連絡通路。災害発生時は避難道路としても活用されます

思い出してもらうきっかけになれば」と期待しています。

命を守る目安桜

津波被害を受け、15年5月に内陸の高台に移設されたのがJR仙石線の野蒜駅。震災復興工事に使用されたベルトコンベアの設置跡が、連絡通路として活用されています。その南口傍らにある「浪分櫻（なみわけざくら）第11号」（地図4）も震災伝承施設の一つ。震災の教訓を未来に伝承するため、市民団体「はなはなプロジェクト」が植樹した祇園しだれ桜です。

プロジェクトは「見る人に希望と復興の力を与える桜の力を借りて1000年先を生きる子どもたちに津波の惨禍の教訓を伝えたい」と仙台市の2人の主婦が設立。

相談の手紙を送ったことをきっかけに交流の始まった京都の造園家・第16代佐野藤右衛門さんから樹齢30年の桜の木27本を譲り受け、宮城県内沿岸で14市町と協力しながら記憶と教訓を未来に伝える「命を守る目安木」として植樹してきました。

津波の到達地点付近に、これよりも内陸に逃げるようにと植樹した桜を「浪分櫻」、現地から要望を受け、人々の心を癒すようにと植樹した桜を「安寧櫻」として分類。6本が第1分類、18本が第2分類の震災伝承施設に登録されています。

取材時にちょうど見頃を迎えていた「はなはなプロジェクト 浪分櫻第11号」

地域資源を磨き 未来を開く

田村市

◀震災で天井が崩落した滝根公民館

福島県田村市は福島第1原発事故の影響で20キロ圏内にある都路地区に一時避難指示が出されました。その後、区域の再編を経て2014年4月には指示が解除。現在は約9割の市民が帰還を果たしています。原子力被災12市町村の中ではいち早く避難が解除されたことから、復興のトップランナーとして力強く歩みを進めています。

田村市の被害状況

最大震度	震度6弱（推定）
建物全壊	19棟
建物半壊	196棟
建物一部損壊	4137棟
関連死	14人
行方不明者	0人
負傷者	5人

※2026年4月現在

田村市は市域の約6割を山林が占める阿武隈高原の中山間地域です。東日本大震災に伴う福島第1原発事故の影響で市の主要産業である農林業は大きな打撃を受けました。

当時、自動車販売会社を経営していた白石市長は、地震発生直後は楽観視していたものの、翌12日に大熊町などから原発事故による避難者が押し寄せ、さらに水素爆発が起きるとその予感は打ち砕かれました。目に見えない放射能への恐怖が広がる中、社員に避難を促し会社は休業しましたが「さらに遠くへ逃れようとする人からレンタカー予約の電話が鳴り止まず『田村市へ行くのが怖いから郡山駅まで車を届けてほしい』という依頼もありました」と振り返ります。

お話を伺った方
白石 高司市長

震災から10日後には会社の再開を決めますが、都路地区の全住民が避難を余儀なくされるなど地域は不安に包まれていました。日本青年会議所福島ブロック協議会の会長も務めていた白石市長は、「放射能の不安を少しでも払しょくしたい」との思いから、2011年の5月、7月、9月に放射能の専門家を招き、誰でも無料で参加できる「緊急市民会議」を開催しました。

地域商業の再興へ

2021年の就任以来、白石市長が一貫して掲げているのはまちの活性化です。打撃を受けた農林業は単なる素材供給から脱却し、地域で付加価値を付ける構造改革を推進しています。その象徴として25年9月には「農産物振興施設」を完成させました。地元のサツマイモを使った干し芋の加工や小麦の六次産業化を促し付加価値を創出することで、市外に流出していた利益を取り戻し、農業を「外貨を稼ぐ成長産業」へと進化させる狙いです。また都路地区の利便性を回復し、地域の誇りを取り戻すため、12月に複合商業施設「コ・ラッシェ都路」がオープン。単なる地元の商店ではなく将来的には国道288号の往来増加を想定した交流拠点としての発展を見据えています。

商工業面では外部誘致に依存せず、地元企業という「花」を大切に育てる「エコノミックガーデニング」事業を導入。経営者の声を直接政策に反映させる仕組みや若者の定着支援を通じ、地域という「庭」全体を豊かにする土壌を整えています。また観光面では、リニューアルした「ムシムシランド」を拠点に「昆虫の聖地」としての発信を強化。「自然界の昆虫が元気に生きている事実はどの言葉よりも雄弁に環境の安全性を物語ります」と話します。防災面では市民の命を守る基盤として、市内100の全行政区に「自主防災組織」を設置する取り組みを加速させ、現在は44組織まで拡大しました。

田村市では現在、震災の記憶を次世代へつなぐため、都路地区の小学校を舞台に、震災後の教育復興の歩みをつづった書籍「未来をつくる小学生」の映画化も計画しています。「まちづくりは歯を食いしばって苦しむものではなく、楽しくあるべきもの。まずはやってみることが大切。その挑戦のプロセスが市民の笑顔と夢につながります」と語ります。

「ムシムシランド」のリニューアルオープン

自然豊かな環境の中で昆虫の生態を学ぶことができます

震災以前はカブトムシの自然繁殖を行う国内有数の施設でしたが、震災と福島第1原発事故の影響で一時休止に追い込まれ、営業再開後も来場者は震災前から大幅に減少しました。建物の老朽化も進んでいたことから2023年4月に移転リニューアルオープン。新施設は建物自体が巨大なカブトムシの形をしていて、世界中のクワガタやカブトムシを中心に約150種1000点の標本が並ぶほか、昆虫との触れ合いコーナーができました。メインのカブトムシドームも、あえて天井を低く設計して虫との距離を縮める工夫が施されています。震災でダメージを受けた森を再生させるための植樹も進められ、キャンプ場なども併設されたアウトドア拠点へと進化。25年は入場者数も震災前の水準まで戻りました。再び昆虫を通して地域を盛り上げる復興のシンボルとして新たな歴史を刻んでいます。

ネットで囲ったドームの中に約1000匹のカブトムシを放し飼いにしたカブトムシドーム

複合商業施設「コ・ラッシェ都路」開業

「コ・ラッシェ」は方言の「こらっしぇ(来てね)」に由来し、地元小学生のアイデアで名付けられました

福島第1原発事故により一時避難を余儀なくされた都路町岩井沢地区に2025年12月に開業しました。震災後、日用品や食品を購入できる店がなく不便な生活を強いられていた地域住民の生活基盤の安定と、交流人口の拡大を図ることを目的に整備しました。施設には食料品や日用品を取り扱う「Domo岩井沢店」、手作りプリンが人気の「みやこじスイーツゆい」、ラーメン店「麺処さとう」の3店が入居するほか、住民の集まりなどに活用できる多目的交流スペースに加え、新たにドッグランも開設予定です。建物は木造平屋建てで、田村市産材を活用した柱やはりなども使用し、木の温もりを感じることができます。また、国道288号沿いの広大な敷地を生かし、今後の需要に応じてさらなる施設の拡充が可能となるよう、増設余地を残して建物が設計されているのも特徴の一つです。

郷土芸能「三匹獅子」の獅子頭を展示した多目的交流スペース

防災倉庫の整備と自主防災組織訓練活動補助金

田村市では地域の防災力向上のため行政区単位で自主防災組織の結成を支援し、災害時の初期対応(情報伝達・安否確認・避難誘導など)を担う組織運営を推進しています。市内100行政区全ての結成を目指していて、現在は44団体が登録しています。結成時には防災倉庫を設置し、水や食料、ブルーシートや非常用工具などの他、各地域の実情に合わせた資機材を備蓄。災害発生時に各組織が迅速な対応を行えるようにしています。また、本年4月1日から自主防災組織が、訓練や地区防災計画の作成事業を実施した際にかかる経費の一部を1団体につき年間5万円を上限として補助する事業も始まりました。

災害が発生した際に迅速な対応ができるよう各地域に設置しています

人と人、人と地域つなぐ 美しき100種のバラ

雄勝ローズファクトリーガーデン

宮城県石巻市雄勝町にある「雄勝ローズファクトリーガーデン」は、東日本大震災で被災した住民が中心になって立ち上げた団体「雄勝花物語」が運営。津波が襲来し、住宅や商店が流失した場所でバラが栽培されています。震災から15年たっても周辺は更地が目立ちますが、バラが人と人、人と地域をつないでいます。

6月はバラとハーブが競演し最も華やぎます

雄勝ローズファクトリーガーデンの開設は、雄勝花物語の代表理事の徳水利枝さんが津波で流された母親や親戚を弔うため、2011年8月に実家跡地に花を植えたのがきっかけです。支援団体やボランティアの協力を得て、花壇、さらには花畑を整備して規模を拡大。がれきの中に色とりどりの花が咲きました。

復興道路の建設のため移転を余儀なくされ、18年3月、約50メートル離れた現在地で再び開園しました。3500平方メートルもの土地の中心に、スペインから復興支援で運ばれてきた樹齢100年のオリーブの木をシンボルツリーとして植え、4種類の庭園で構成。バラの栽培に力を入れ、今は約100種が栽培されています。例年5月末から順次開花し、見頃を迎えるのは6月。秋に咲く品種もあり、年2回のシーズン中は観賞に訪れる人で特ににぎわいます。

これらのバラやオリーブ、ハーブは利枝さんを含むスタッフ6人で管理。修学旅行の中・高校生や企業ボランティアが定期的に訪れ、手入れなどに参加しています。

「3～12月はカフェも開いています」と利枝さん

防災教育も実施

敷地内の温室には、雄勝の被災状況やガーデンの整備風景を紹介する資料を展示。利枝さんの夫の博志さんが中心になり、津波防災教育プログラムも受け入れています。

震災から15年が過ぎ、利枝さんは訪れる人々の目的が変化してきていると痛感。「被災地の視察より、バラを目当てにいらっしゃる方が多くなりました。特に県外の方や、県内でも内陸に住んでいる方は、震災関連のパネルを見て、ここに津波が来た事実を知って驚かれます」と明かします。

震災の風化が懸念されていますが、「バラや花をきっかけに、雄勝に人が集まってくれるだけでうれしいです。元住民も、震災前の景色を知らない方も、通ってつくり上げる古里だと思ってもらえれば」。

これまで、ガーデンを会場に結婚式やフォトウエディングを行ったカップルもいます。

2011年、がれきの中に花を植えたのが始まりです

「バラのフラワーシャワーがし放題。楽しい思い出をつくる場所でもありたい」と願います。

雄勝花物語をはじめ5団体で結成する「雄勝ガーデンパーク推進協議会」による「雄勝ガーデンパーク事業」の一環で、ガーデンの周辺一帯にも花や緑が増え、農園や多目的広場、ワイナリーなどが誕生しました。人が集い続ける場所にしようと、事業は進行中です。

所在地／宮城県石巻市雄勝町雄勝味噌作34-2
TEL090-9037-4593

田野畑村・石巻市雄勝地区の震災伝承施設
（雄勝地区は第3分類のみ隣接の河北地区）

石巻市雄勝地区

第3分類
●**石巻市震災遺構大川小学校** 石巻市釜谷字韮島94

第2分類 ●**石巻市雄勝地区慰霊碑及びモニュメント** 石巻市雄勝町雄勝字伊勢畑2-4 ●**はなはなプロジェクト 安寧櫻第4号** 石巻市雄勝町雄勝字伊勢畑2-4

第1分類 ●**昭和8年3月3日 大震嘯災記念碑（名振）** 石巻市雄勝町名振字東12-49 ●**昭和8年3月3日 大震嘯災記念碑（荒浜）** 石巻市雄勝町船越字荒13-1

田野畑思惟ICと直結 利便性、格段に高まる

道の駅たのはた 思惟の風

岩手県田野畑村の観光拠点の一つが「道の駅たのはた思惟（しい）の風」です。田野畑村は断崖絶壁の奇観が連なる北三陸沿岸のほぼ中心で、三陸沿岸道路のルート上でも宮古市と久慈市の中間に当たります。昨年末に田野畑思惟インターチェンジ（IC）が開通したことで、道の駅は三陸道と直接行き来できるようになりました。年間を通じて来場者の増加が期待されています。

田野畑村の自然と調和したデザインの道の駅外観

道の駅たのはたは1996年4月のオープンで今年30周年を迎えました。当時は国道45号の思惟大橋に隣接する公園にあり、生産者組合が運営。三陸道の延伸ルートと重なったため約500メートル北側に移転し新築した施設は、2021年4月に正式開業しました。

新施設は地上2階地下1階の構造で、田野畑村の山並みをイメージした外観。館内の屋根は牛舎をモチーフに岩手県産材を使用。以前と比べて広く、明るい施設となり、土産品の販売なども本格的に始めました。生産者組合は高齢化のため解散し、新施設に合わせて立ち上げた「一般社団法人思惟の風」が運営に当たります。

理事長で駅長も兼務する清水川知弘さんは「一般社団法人は出資金がない分、自分たちの力で利益を生み出す必要があります。だからこそ地域の魅力を磨き、商品やサービスの質で勝負したい」と語ります。

「クロモジ」を活用したオリジナル商品が並ぶ

前年同月比300％

移転オープンしましたが、三陸道から利用するには当初、最寄りでも約2・5キロ離れた田野畑中央IC経由でした。しかし道の駅の隣には三陸道の田野畑チェーンベース（CB）があり、村が国土交通省に要望しCB併設として田野畑思惟ICが昨年12月6日に開通。三陸道と道の駅が直結しました。

その結果、厳冬期の今年2月でも、来場者は前年同月比の300％、約2万8000人増えました。清水川さんは「これを好機と捉え、飲食や土産品、設備の充実など多くの人に気持ちよく利用してもらえる施設として磨きをかけたい」と張り切ります。

「ICと直結したこれからが正念場」と張り切る清水川さん

田野畑村は1次産業が盛んで、芳香のある落葉低木の「クロモジ」を素材にした茶やクラフトコーラ、シロップなどユニークな商品を販売。カモ肉の生産量は全国トップクラスを誇り、「たのはた鴨（かも）」のブランドで精肉や加工品を取り扱っています。

フードコートではカモがらベースのスープに鴨肉チャーシュー、ネギを組み合わせた個性的な「鴨ラーメン」（一日10食限定）が人気。特産のワカメや牛乳を使ったみそ味の「ワカメたっぷりミルク麺」は濃厚なミルクスープが特徴です。

清水川さんは「当駅のコンセプト『村内外の交流を生み出す場』として、さまざまな取り組みにチャレンジしていきたい。産直出品者も新しい人が増えてきました。外からの来訪はもちろん、村民も気軽に利用でき、情報を発信できる施設になれれば」と決意を新たにしています。

所在地／岩手県田野畑村菅窪151-6
TEL0194-32-3555

第3分類（訪問しやすく、案内員の配置や語り部活動など、来訪者の理解のしやすさに配慮した施設）、第2分類（公共交通機関等の利便性が高い、近隣に有料または無料の駐車場があるなど、来訪者が訪問しやすい施設）、第1分類（災害の恐怖や自然の畏怖、教訓が理解できるもの など）。

田野畑村

第3分類
- **震災遺構明戸海岸防波堤** 田野畑村明戸海岸
- **島越ふれあい公園** 田野畑村松前沢1-4
- **羅賀ふれあい公園** 田野畑村羅賀27-2

第1分類
- **津波石碑（昭和八年津浪記念碑）** 田野畑村島越（広福寺）

Topics & Information

台湾高雄市の高校校長5人が宮城、岩手の震災伝承施設来訪

一般財団法人3.11伝承ロード推進機構は、震災伝承施設を防災教育に活用し、台湾からの教育旅行の誘致に取り組んでいます。5月20～25日には台湾・高雄市の高校教育関係者5人を招き、宮城、岩手両県の震災遺構や伝承施設をはじめ学校訪問や現地見学を行いました。

来訪した5人は高雄市立の仁武高級中學、前鎮高級中學、高雄高級中學と国立の鳳山高級中學、鳳新高級中學の各校長です。仙台空港発着で仙台市から大船渡市にかけてと一関市、平泉町を訪問し、東日本大震災の伝承施設を見学したり、歴史や文化に触れたりしました。

主な招請行程

月　日	エリア	主な行程
5月20日		●台湾から仙台へ移動
21日	宮城県仙台市	●仙台育英学園高等学校訪問 ●震災遺構仙台市立荒浜小学校見学
	宮城県松島町	●松島見学（宮城県松島高等学校の生徒さんによる案内）〈福浦橋、五大堂、瑞巌寺、李登輝俳句碑、円通院〉 ●松島湾語り部クルーズ
22日	宮城県南三陸町	●南三陸町語り部バスにより見学〈旧戸倉中学校～南三陸病院（石碑）～旧防災対策庁舎〉 ●南三陸311メモリアル見学 ●南三陸町観光協会によるコンテンツの説明
	岩手県大船渡市	●岩手県立大船渡高等学校訪問
23日	岩手県陸前高田市	●高田松原津波復興祈念公園見学〈東日本大震災津波伝承館、道の駅高田松原、奇跡の一本松など〉 ●ワタミオーガニックランド見学 ●陸前高田市教育旅行セミナー〈会場：岩手県立高田松原津波復興祈念公園管理事務所〉
	岩手県一関市	●猊鼻渓〈舟下り体験〉
24日	岩手県平泉町	●世界遺産平泉見学〈中尊寺、毛越寺〉
	宮城県仙台市	●西方寺（定義如来）
25日	宮城県仙台市	●仙台城跡見学 ●震災伝承ネットワーク協議会（東北地方整備局）表敬訪問 ●仙台空港から台湾に帰国

▶震災遺構仙台市立荒浜小学校（見学）

▲岩手県立大船渡高等学校（学校訪問）

▶高田松原津波復興祈念公園（見学）

◀震災伝承ネットワーク協議会（表敬訪問）

表紙

被災地を歩く

鉄路復活、面影残すモダン駅舎

島越（しまのこし）ふれあい公園（岩手県田野畑村）

海のそばまで100～200㍍級の断崖が迫る岩手県田野畑村島越地区。南北の断崖の間に、わずかな平地が細長く東西に延びる。この地にある三陸鉄道の島越駅の愛称は「カルボナード」。宮沢賢治の「グスコーブドリの伝記」に登場するカルボナード火山島にちなんだ名称だ。東日本大震災前はメルヘンチックな外観の駅舎が好評で、「目の前に海が広がる、おしゃれな南欧風の独特な駅舎」として2002年「東北の駅百選」に認定された。

震災の津波で駅舎も高さ約10㍍の高架線路も跡形なく流失した。旧駅舎の100㍍ほど北側の高台に2013年12月、新駅舎の工事が開始。翌年4月には小本（現・岩泉小本）駅と田野畑駅間の復旧により営業を再開し、7月に新駅舎の使用が始まった。モダンな八角形の塔屋など旧駅舎の面影を残し、復興のシンボルとして再び人気を集めている。

旧駅舎跡地は「島越ふれあい公園」に生まれ変わった。旧駅舎の脇にあり、津波に耐えた宮沢賢治の詩碑がたたずむ。この地を襲った津波の最大高17.9㍍を表すモニュメント「津波高表示塔」も設置された。近くには北山崎を巡る観光船発着場もある。

三陸鉄道の列車がのどかに走る光景は戻ったが、復活までに懸命な作業があったことは想像に難くない。

所在地
岩手県田野畑村松前沢1-4

伝承ロード縁　2026年6月11日発行
発行／一般財団法人3.11伝承ロード推進機構　編集・制作／株式会社クリエイティヴエーシー
記事を見ての感想、取り上げてほしい話題など、ご意見をお寄せください。　info@311densho.or.jp　FAX022-393-4271
無料